

## 河野広中覚書(下)

著者	長井 純市
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	73
ページ	1-23
発行年	2010-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10904">http://hdl.handle.net/10114/10904</a>

## 河野広中覚書（下）

はじめに

### 一 自由党脱党以前

#### 1 政治経歴の原点

#### 2 政治運動家としての軌跡（以上、前号）

#### 3 政治家としての軌跡（以下、本号）

### 二 自由党脱党以後

#### 1 脱党後の政治基盤

#### 2 中央政界における不遇と輝き

#### 3 批判と称賛

おわりに

### 3 政治家としての軌跡

初期議会期から第一〇議会の会期中に脱党するまでの

河野広中覚書（下）（長井）

長井純市

間、河野は自ら政局を動かそうとする、躍動する政治家であつた。常に輝き続ける存在であつた。

すでに、その時期の議会については、優れた先行研究があり、本稿では河野に関して行論上必要な叙述のみに止める。<sup>(83)</sup>

第一議会の開会を前に、河野は中島信行・片岡健吉・大江卓・竹内綱らの党幹部と共に、曾禰荒助衆議院書記官長を介して、山県有朋首相および松方正義蔵相と会見した。そして、国際的見地から最初の議会の解散は避けるべきであることを伝えたのであつた。<sup>(84)</sup> 山県首相も、もちろん、同様の考えを有していた。<sup>(85)</sup> もっとも、議会開会前に山県首相が河野らに本音を明かすことはなかったであろうが、河野らの考え方を重く受け止める姿勢は見せたであろう。河野

が首相となっている人物と会見したのは、このときが最初である。党を代表していたというものの、また山県首相が議会運営の手がかりを求めていたというものの、こうした会見ができたことは、河野の自信を増したことであろう。一方、こうした水面下の交渉を河野が行えることにも注目すべきである。後述するように、のちに河野は、議会会期中、自由党を代表して他党との交渉委員を務めることがたびたびあったが、それ以外に、藩閥政府関係者と水面下の交渉を行ったことも何度かある。それは、彼がそうした政治手法を使うことに躊躇や後ろめたさを感じないからでもあろう。彼は、自由民権運動以来の政治信念に基づいて、そうした交渉を行っていたのである。

明治三十三年一月二五日、第一議会の召集日に三名の衆議院議長候補選出のための投票が行われたが、河野はこのとき一〇〇を超える票数を得た。しかし、結局、三名の議長候補には入れなかった。立憲自由党（院内会派としては弥生倶楽部）内部で事前にどのように議長候補の調整が行われたのかは不明であるが、得票数トップで議長に任命されたのは同党の中島信行であった。

次いで、河野が注目されたのは全院委員長選出をめぐる投票においてであった。全院委員長ポストは、三つの

常任委員会（予算委員会・懲罰委員会・請願委員会）の委員長および議案毎に付託される特別委員会の委員長を決定する投票の前に行われること、また同委員会が議院の権限に関して法律解釈を下すような協議の場であることからすれば、重要なポストといえよう。このとき、立憲自由党は河野を全院委員長候補として推したと思われる。投票は三度にわたって行われたが、最初の二回では河野がトップの票数を得た。しかし、いずれも投票総数の過半数を得るに至らなかったために、三度目の投票が行われた。三度目の投票では、最多得票者をもって当選とすることとなった。河野は二度の投票で勝っていたにもかかわらず、この回では島田三郎（立憲改進黨。院内会派名としては議院集会所）に敗れた。議長を立憲自由党が、副議長を大成会がそれぞれ占めたことから、全院委員長は立憲改進黨に譲るという動きが出てきたのかも知れない。河野は、結局、第一議会の衆議院において委員長ポストに就くことはなかった。

しかし、最初の議会において福島県選出の代議士として全国にその名を轟かせたことは、地元支持者の誇りとし、歓喜するところであったであろう。すでに自由民権運動家として全国ブランドであった河野は、今や国政を担う代議

士としても全国ブランドであることを見せつけたのである。大正時代の後半、河野の晩年に至るまで福島県では河野支持勢力が優勢を保ち続けたが、その理由としてこうした河野の知名度の高さは何より重要視されるべきであろう。

のちに対外硬の勢力が高まるなか、第五議会において二本松出身の安部井磐根が福島県選出の代議士として初めて副議長に任命されたが、河野の全国ブランドとしての価値は安部井を大きく上回っていた。自由党脱党までの間の議長候補選挙において河野の名が上がったのは、第三（同じ自由党の星亨に敗れた）、第六・第七（共に立憲革新党の楠本正隆に敗れた）、第二〇（進歩党の鳩山和夫に敗れた）の各議会であった。

この他、第三議会において「議場内に於ては、河野広中をして総理を代理せしむ」として党の「院内統裁」に任じられ、第四議会においても党の院内総理に任じられると共に、衆議院の予算委員長となった。

さて、第一議会は、いわゆる土佐派の裏切りによって、明治二四年度予算案をめぐる山県内閣と衆議院多数派の妥協が成立し、解散の危機を乗り越え、閉幕した。その間、河野がどのような言動を発したのかは、必ずしも明らかでは

ないが、妥協を排する姿勢を有していたようである。しかし、土佐派の裏切り、そして脱党については、これを批判しなかった。そして、脱党者の心事に「同情」し、「復党」を呼びかけたのであった。<sup>(88)</sup>さらに、明治二四年三月二〇日、大阪で開催された党大会では総裁の設置と板垣の総裁就任を進めたのである。こうした姿勢は、河野が第一議会に対して前述のような特別な思いを抱いていたことによるものであり、また板垣ら土佐派こそは、自由民権運動時代以来の関係を背景として、河野の党内リーダーシップを保証する最大の要素であったことによるものであろう。

第二議会においても河野は、第一議会以来のスローガンである民力休養・政費節減を掲げて果敢に松方正義内閣を批判し、樺山資紀海相のいわゆる蜜勇演説にも内閣の連帯責任追及の可能性を探る巧妙な質問書を発している（これに対する政府の答弁書は、海相個人の責任で「所思」を述べたという簡略なものであった）。

第二議会が結局解散に終わったのち、第二回衆議院議員選挙（明治二五年二月一五日）における激烈な選挙干渉をくぐり抜けて迎えた第三議会において、河野は「選挙干渉ニ関スル上奏案」の提出者の一人として提案理由説明の演説を行った<sup>(90)</sup>（なお、その際、河野は次のような立憲政体観

を述べている。「海外各国の立憲政体は、変乱の間に起つたと云ふことであります。然るに我邦は之に反して和氣藹々の間に此立憲政体の成り立ちましたのは、偏に我聖天子の賜であると深く信じて居る次第であります」<sup>(91)</sup>。この発言は、河野が革命のような暴力的な動きを否定する考え方を有していたことを再確認させるものであろう。その一方、河野は、五月一六日から同二二日までの停会期間中に、伊藤博文枢密院議長の女婿である末松謙澄（衆議院議員、中央交渉部）と水面下の交渉を持った。河野は、板垣の意向を体して、伊藤内閣の登場を要望しているとの情報を末松に寄せていたのである。すなわち、河野は表面において松方内閣を攻撃する一方、その裏面において伊藤内閣の出現を工作するという策士ぶりを発揮していた。

第四議会の焦点は、自由党のいわゆる積極主義への方針転換と和衷協同の詔勅（明治二六年二月一〇日）であった。河野は、党の総理板垣が方針転換を表明した党大会（明治二五年十一月一日）の議長を務める幹部であったから、この方針転換を進めた一人であったと見られる。また、海軍省所管の経費削減をめぐる議会が紛糾し、結局、和衷協同の詔勅により第二次伊藤内閣との妥協を求められた際に、政府との交渉にあたる九名の特別委員の一人

として活躍した。この妥協（明治二六年二月一日）をうけて、河野は藩閥の政党化、そして藩閥と政党を縦断する二大政党制の樹立を立憲政体の完美と考えるに至ったという<sup>(93)</sup>。前述の通り、すでに河野は板垣の意を体して伊藤への親近感を示しており、今また議会の流れ、すなわち自ら提出した内閣不信任上奏案の可決（明治二六年二月七日）から和衷協同の詔勅を経て、政府との妥協に至るという一連の流れをうけて、河野は自信を深めたのであろう。この議会での河野の活躍ぶりには支持者から称賛の声が寄せられた<sup>(94)</sup>。

第五、六議会は、星亨衆議院議長不信任問題と対外硬問題で揺れた。

河野は星議長不信任問題では積極的に星を擁護する姿勢を見せなかった。すでに、第三議会における衆議院議長候補選出において河野は星に敗れた際に、その理由を「星一派が暗中飛躍の策を講じ」<sup>(95)</sup>たためであるとして、不快感を示していた。さらに、明治二五年十二月、朝鮮駐在公使に任じられた大石正巳が、赴任前、河野に星が井上馨内相や陸奥宗光外相を介して伊藤内閣と内通していると吹き込んでいたことも影響したかも知れない。もっとも、内通自体は批判されなかったであろう。星が、河野を差し置いて独

自の対政府交渉経路を有していることに不快感が抱かれたということであろう。

星は、明治二六年一月二三日に懲罰動議が可決され除名処分をうけたが、小宮一夫氏によれば、そのとき河野も星排除に動いていた節があるという。<sup>97</sup> かつて、いわゆる福島事件で弁護人と被告人との関係であったこの二人の自由民権運動家は、今や共に職業政治家となつて、かつてのような親しい関係を保ち得なくなつていた。

これより先、この問題で星への不信任感を高めていた一九名の自由党代議士が、一月下旬から翌一二月始めにかけて脱党したが、その内東北地方出身者は六名に上つた。六名とは、工藤行幹（青森県選出）・柳喜洋芽（同上）・菊地九郎（同上）・荒谷桂吉（秋田県選出）・野出鋤三郎（同上）・坂本理一郎（同上）である。このあと、一月中旬に河野の盟友であつた同郷の鈴木万次郎も脱党した。自由党所属の東北地方出身代議士は総勢一三名であつたから半数以上が抜けたことになる。これを見ると、一般にいわれる自由党東北派という人的結合は一枚岩ではなかつたようである。また、河野が統率していたともいえないようである。おそらく、自由民権運動時代以来の人間関係と地域感情を共有する緩やかな人的結合であつたのであろう。

河野広中覚書（下）（長井）

さて、対外硬に対する河野の態度は明快であつた。彼は、平等な条約の早期締結をめざす立場から、対外硬が主張する現行条約勵行論や内治非難居論に反対していた。そして、それは支持者の賛同を得ていた。福島の前田十衛は「所謂勵行論は到处に排斥を受け候もの」と相見へ安部井「磐根。対外硬の中心人物」派の有力者中にも勵行論に反対致候ものも有之<sup>98</sup>と報じ、また須賀川の藤井真太郎も「勵行問題に対しては先以て当地方之有志は冷淡而已不成、同志之人々も勵行とは如何なる事於謂なるや不明之有様<sup>99</sup>」と伝えてきていた。

第五、六議会はいずれも解散に終わったが、第五議会解散後に行われた第三回衆議院議員選挙において、河野は対外硬の安部井磐根候補落選の工作を行つてゐる。しかも、政府と連携してである。<sup>100</sup> ここにも河野の水面下の交渉を見ることが出来る。

第七、八議会は、日清戦争による挙国一致の高揚の中で無事に済んだ。河野も、その全面的な協力者の一人であつた。

さて、河野の自由党脱党以前の代議士経歴において、第四議会と並んでハイライトとなるのは、第九議会において第二次伊藤内閣と自由党との提携に尽力したことである。

う。これについては、すでに升味準之輔氏によって詳述されているところである。<sup>(10)</sup>

河野は、林有造・松田正久の兩人と共に党幹部として、この提携交渉にあたった（政府側の交渉者は伊東巳代治内閣書記官長）。そして、党への資金援助や党総理板垣の入閣（内相就任）も実現させたのである。しかし、結局、同内閣退陣によって、河野がめざしていたと思われる藩閥の政党化、そして政党内閣樹立への道は潰えてしまった。

この提携について、駐日露国公使のスピーヤは、自由党が伊藤首相に欺かれたものと手厳しく批評した。<sup>(11)</sup>そして、そうした見方は党内にも広がり、提携交渉にあたった幹部への批判が噴出し、さらには脱党者（明治三〇年一月）を見るに至ったのである。

明治三〇年一月一〇日に開催された臨時党大会で、河野は林有造・松田正久と共に政務委員となり、党幹部としての立場を保ってはいた。しかし、第一〇議会の会期中ではあったが、二月一五日付で「退党趣意書」を党本部に提出する事態に追い込まれたのである。二月一四日、河野と会見した同党の代議士龍野周一郎は、その日記に河野が落涙しつつ脱党の決意を語ったことを記している。<sup>(12)</sup>河野は余程

悔しい思いをしていたのであろう。

しかし、林有造や松田正久は党にとどまり、河野だけが脱党に至ったのはなぜであろうか。いうまでもなく、林・松田兩人にも批判の矛先は向けられていた筈である。河野が他の二人よりも責任意識が一段と高かったためかも知れない。では、なぜ河野一人が一段と重い責任を背負わねばならないのか。いずれにせよ、この疑問を解明する史料は管見の限り存在しない。

退党趣意書も、脱党理由を明快に語っていない。もっとも、そのこと自体が河野の責任の重さを暗示するものといえるかも知れない。要するに、政党内閣を実現し立憲政治の完美をめざしたものの、「元老」や「旧套」のために挫折したという趣旨なのである。これでは、河野も被害者であるかのようなのである。たとえ、そうだとしても責任を免れることは出来ない。いやむしろ、河野の政治交渉におけるナイーブさを認めることとなり、いつそう責められることになりかねない。

推測によるわけではないが、河野は、この提携にあたって、自らの理想や功績を声高に党内で吹聴したのではなかったろうか。その分、理想が挫折したときに、政府から金銭の供与を受けていたことと相俟って、河野に批判が集

中したのではないかと思われる。そして、ナイーブな河野自身も本意が認められない状況に苦しみ、脱党を決意したということではなからうか。

後年のことになるが、明治三三年頃の演説草稿と見られる文書の中で、河野は「政治家程腐敗し易きもの無し」と書き記している。また、大正二年、桂新党に参加する河野は、それを正当化する論理の中で、「老生、本年六十五歳。今日に至る迄半文銭と雖不正の金を得るの覚なし」と述べている。<sup>106</sup>河野は、第二次伊藤内閣との提携条件に関わる金銭受理についても、本気でこのように考えるナイーブさを有していたのかも知れない。

かくして、河野は中央政界で活動する最大の基盤を手放した。そして、党内では提携交渉の傍流にあった星亨がこののち力を増していくのである。

ただし、地元福島県における情勢は変わらなかった。河野の脱党直後、福島で開催された自由党支持者の緊急の会合では、河野の脱党を支持し、河野の進路に従うことが決定されたのである。<sup>107</sup>

## 二 自由党脱党以後

### 1 脱党後の政治基盤

河野広中覚書（下）（長井）

自由党脱党後の河野は、もはやそれ以前のように中央政界での政局に深く関わって躍動し、強烈な存在感を示す政治家ではありえなかった。しかし、そうした状況においても時折、花火のように一時的にまばゆい輝きを放つ場面を有することがあった。それがなぜ出来たのかは、河野の持つ政治資源と中央政界での新たな役回りに注目する必要がある。

自由党脱党後に河野が所属した院内会派・政党は次の通りである。

東北同盟会（明治三〇年五月）、同志倶楽部（明治三一年五月）、憲政党（同六月）、憲政本党（同十一月。明治三六年一二月脱党）、無名倶楽部（明治三七年三月）、同政会（同十一月）、政攻倶楽部（明治三八年一二月）、猶興会（明治三九年一二月）、又新会（明治四一年一二月）、立憲国民党（明治四三年三月。大正二年二月脱党）、立憲同志会（大正二年一二月）、憲政会（大正五年一〇月）。

脱党後、最初に結成した会派に東北の文字が冠せられていることは象徴的である。全国ブランドから東北ブランドへの格下げといえようか。脱党から一年三ヶ月を経て、第一二議会（明治三一年五月開会）における議長選挙の第一回日の投票で広中は七票を獲得、第二回日の投票では七二



票を獲得した。また、副議長候補としても第一回目の投票で五票を得た。議長、副議長候補として名前があがったのであるから、少数会派所属の代議士としては善戦したといえるかも知れないが、初期議会以来の流れから見ると、議長、副議長候補者としての広中の価値は大きく色褪せたといえよう。

次に、憲政本党以降、旧立憲改進黨系の組織に所属したことも注目される。

明治三十一年六月、自由党と進歩党（旧立憲改進黨系）との合同により憲政党が結成された。河野は同党の結成に参加したものの、同党においても、また同党を与党とするいわゆる限板内閣においてもポストを得ることはなかった。自由党脱党後一年四ヶ月の間、中央政界における河野の存在感はずでに希薄であり、何よりも旧自由党派には河野に対する拒絶感が残っていた。一方、旧進歩党派にも河野を「外様」視する向きがあった。<sup>(10)</sup>

河野自身も、同内閣には冷ややかな視線をおくった。すなわち、党員の鴛官運動を目の当たりにして、内閣が短期に終わることを懸念したのである。<sup>(10)</sup> これをもって、河野はポストに執着しない清廉な政治家であると好意的に評することも出来るかも知れないが、それよりもむしろ、大政

の主流、中心軸から大きく離れた政治家になってしまったという冷厳な事実が改めて確認されるのである。

憲政党が一〇月から十一月にかけて分裂したのち、河野は旧進歩党派の憲政本党に所属することとしたが、それは、旧自由党派内の河野に対する拒絶感にいたたまれず、旧進歩党派の河野に対する「外様」視の方が彼にとってまだしもましだったことを意味する。

この河野の去就について、旧友荻宿伸衛は、「昔日の地位に復して、手を携いて浮沈せん」と河野の憲政党（旧自由党派）入りを勧めた。荻宿は河野の「地位令聞の当年の自由党に於けりしが如く爾く旺盛なるべきことを祈」ったのである。荻宿の目には、河野が「何等の因由を有せざる、否な曾而百年政敵として戦ひたる憲政本党「旧立憲改進黨、旧進歩党」と進退を同ふする」ことは「大恨事」と映り、「憲政本党は断じて貴下の身を置くべき地盤にあらざるべし」と思われたのであった。<sup>(10)</sup> しかし、河野はこれを見聞き入れなかった。

河野にとって幸いだったのは、同郷の代議士鈴木万次郎の他に平島松尾、愛沢寧堅の旧友三名が行動を共にし、憲政本党に所属したことである。このことは地元選挙区の支持者に一定の安心感を与えたであろう。明治三十一年一二

月、憲政本党福島支部が創立されたが、旧自由党派で河野を支持する有志の多くが同党に加入したから、旧進歩党派と合わせて憲政本党の福島県における勢力は大きなものとなった。<sup>(10)</sup> もっとも、のちのことになるが、標葉郡の支持者猪狩真琴は河野に宛てた書翰の中で「貴下は県下の旧進歩派の諸士を誘掖糾合したる積りなるべしと雖ども彼等諸士は貴下の降服し来るを便利なりと思惟するのみ」と冷酷な判断を示したのであった。<sup>(11)</sup>

ともあれ、福島県政界における河野の影響力は保持された。河野支持派は福島県会で優勢な勢力を構成し、河野がその後議会における所属会派を転々としても継続された。県政における河野支持派の優勢が崩れたのは大正八年九月の県会議員選挙においてである。そこで河野支持派は、遂に、対立する立憲政友会派に最大多数派の地位を奪われた。<sup>(12)</sup> 翌大正九年五月の第一四回衆議院議員選挙でも福島県で河野の所属する憲政会は獲得議席数において立憲政友会に敗れるに至る。

では、なぜ郷里福島県でそのように優勢な情勢が長期間にわたって続いたのであるうか。これは、自由民権運動以来の河野の人間性（ナイーブさを含む）と人的結合の妙に帰すほかない。例えば、河野の死去直前に後事を託され、

河野広中覚書（下）（長井）

死後葬儀委員長となった鈴木寅彦は、「私は翁の知遇を受けた事は頗る深いが『中略』其関係の生じたのは新しい方である。謂はゞ翁の末子と云ふ地位に在った。『中略』私は今日まで翁には随分我儘も言ひ遠慮ない事も語つたか、翁は真剣な問題になると無言の儘涙を流される、とうとう翁の涙に釣り込まれて翁の言ふまゝになつて今日までやつて来た」（大正一三年一月五日付福島民友新聞）と回想している。このような容易に説明しがたい情緒的な要因も河野を取り巻く人的結合にはあつた。その他に、河野が中央政界では福島県出身者として唯一人全国的な知名度を誇る代議士だったことも重要な結合要因であろう。中央政界での重みが失われたとはいふものの、長い間熱心に地方遊説を行つてきたことにより、その知名度は依然として保たれていた。郷党がそれを誇りとしたことは容易に想像される。こうして河野は終生代議士の身分を失うことがなかったのである。

## 2 中央政界における不遇と輝き

さて、中央政界に目を転じると、河野の衰勢は明らかであつた。

「荏苒此の儘に打過きられ候は、前途は殆んど絶望と被

存候<sup>(13)</sup>。これは、明治三四年六月二一日に立憲政友会の指導者の一人となつていた星亨が東京市役所内で伊庭想太郎に斬殺された四日後に発信された書簡の一節である。当時の河野の不遇な状況を言い表している。書簡の中で発信者の平島松尾は河野に星没後の立憲政友会における関東・東北派の乗っ取り、あるいは板垣を担ぎ出しての新党結成を提案した。途方もない提案ではあるが、郷里福島県での自由民権運動以来の僚友であつた平島は、それほど河野の前途に不安を抱いていたのである。平島には、かつて河野の進路を誤らせたという悔悟の念もあつた。それは、ことによると自由党脱党の勧めであつたかも知れない。もちろん、河野はこの提案に乗らなかつた。

不遇な状況はさらに続いた。翌明治三五年には「なれても鯛<sup>(14)</sup>」という辛辣なことが旧友の猪狩から河野に向かつて浴びせられた。この年二月、第一六議会上に河野は中村弥六、花井卓蔵らと共に普通選挙法案を衆議院に提出したのではあつたが（結果は否決）。

猪狩は、河野の不遇の始まりについて、次のような謎めいたことを書き記している。

貴下同志の最優勢なりしは明治二十七、八年頃には非ざりしか。当時、貴下同志の士は多く貴下の益友にし

て徳に重く義に深きの人なりき。然るに、貴下は一時驕傲なる悪鬼に魅せられ不幸にも其益友を疎んし、延いて某々の徒輩を福嶋に派遣し、彼の醜の大醜なる常置委員輪毒誓約証書と称する奇態なる誓約書に保証、調印せしむるもの実に貴下今日の境遇を醸成したる最重なるの一原因なり。物腐れて虫生ず。貴下尚ほ未だ睨り得ざるや否や

河野の自業自得を責めていることは理解されるが、具体的にどのようなことがあつたのかまでは分らない。猪狩は来るべき衆議院議員選挙に向けて河野の地元における積極的な選挙運動を促しているのであるが、さらに「貴下は学識に乏しきの嫌ありと雖も又温平たる顔容と其の座作の法なるとは猶未だ優として郷里の父兄をして名譽の得票を為さしむるに余りあり」と叱咤激励している。

同様に、日露戦争中の明治三八年七月一二日付河野広中宛鈴木万次郎書翰<sup>(15)</sup>も「諺に腐ても鯛は鯛なり。鯛には無之。世間か貴台を何と云ふか。政略か一時如何に貴台を逆遇せよふか、そは訪「問」ふ所に非ず。貴台には貴台の信する所あるへし。〔中略〕貴台か数十年の歴史は自ら破壊し去りて俗吏の古手と伍を同しうする事に」ならぬようにと釘を刺している。そして、「韓国に於て二箇偉大なる我

が国の政治家を鎮在せしむるの必要なる也」として朝鮮での復活再生、名譽挽回を提案したのである。さらに、同年八月二六日付河野広中宛安瀬敬蔵書翰<sup>106</sup>は、「貴台近来「中略」如何にも運勢に至らず候間、日白雲照律師」の祈禱による厄払いを提案した。

河野は、これらに応じなかったが、こうした不遇な状況が日露講和反対運動の直前であったことは、このあとの河野の行動を考えると、示唆的である。

こうした不遇の中で、明治三六年第一九議會では三〇〇票を上回る得票を得て衆議院議長に任命され（そして、勅語奉答文問題を起こし）、その後、大正四年には農商務大臣のポストを与えられている。

また、その間、明治三八年九月五日には日比谷公園での日露講和条約に反対する講和問題同志連合会主催の国民大会において議長におされて決議を議決し、久しぶりに名を上げた。大会後、日比谷焼き打ち事件の首謀者として兇徒嘯聚罪の容疑で逮捕、起訴されたものの、結局、明治三九年四月に無罪判決を勝ち取った。なお、河野に直接関わることはないが、この無罪判決には後日談がある。判決後、東京控訴院検事長であった倉富勇三郎は控訴すること、松田正久司法大臣（第一次西園寺公望内閣）に訴えた。

河野広中覚書（下）（長井）

当初、河野らの起訴に慎重であった検察側の一人である倉富が控訴を唱えた理由は不明である。しかし、この控訴案は、四月二四日、控訴しないとの閣議決定が松田法相から倉富らに伝えられて沙汰止みとなった。こうして、河野は控訴され、更なる裁判闘争に明け暮れることを免れたのであった。まさに司法に対する政治干渉により救われたというべきであろう<sup>107</sup>。

しかし、これらの事態は、衆議院議長就任に向けて自ら周旋を行ったケース<sup>108</sup>を除けば、河野の民権派ナショナリストとしての知名度を利用したものであったろう。つまり、河野は輿として担がれたのである。勿論、河野は単純に輿に乗せられた訳ではない。こうした事態の根底には彼自身の対露強硬論があった。河野は、初期議會における現行条約勸行論と内地非雑居論を柱とする対外硬には反対であったが、対露早期開戦論を柱とする対外硬においては有力な一員であったのである<sup>109</sup>。

農商務大臣就任は党人派長老である河野への恩賞人事以外に考えられない。河野が国の農商務行政に一家言を有する政策通でなかったことは、大臣就任にあたっての彼自身の抱負が当時の新聞に報道されていないことから明らかにである。そして、農商務大臣を辞任したあとの河野は、再

び影の薄い存在に戻ってしまったのである。大正六年頃、河野は憲政会において一人の配下をも有せず、領袖として仰がれることもない状況にあり、脱党して、寺内正毅内閣側に転じる計画すら噂されたという<sup>(120)</sup>。

なお、対露強硬論を有する対外硬としての河野の韓国問題への見方について触れておこう。明治四〇年七月付で河野は、大竹貫一、小川平吉、国友重章、五百木良三、頭山滿らの五名と共に、第一次西園寺公望内閣宛および伊藤博文統監宛に、「日韓両国を合併すること」を求める建議書<sup>(121)</sup>を提出している。この建議書は、同年六月に、韓国の皇帝がハーグで開催された万国平和会議に密使を派遣し、日本の韓国侵略を国際社会に訴えようとして果たせなかった事件をうけて、提出されたものである。

建議書は、韓国の皇帝に主権を禅譲させて日韓合併を行うとする第一案と、韓国の皇帝に皇太子への譲位を行わせて上で同国の統治権を日本に委任させるとする第二案の二つを提案しているが、第一案を「上策」とした。河野が他のメンバーと共に連署するに至った事情は不明であるが、日露講和条約反対運動で行動を共にした対外硬勢力とのつながりが続いていたと見て良いであろう。

河野は、韓国併合に積極的な対外硬勢力と歩調を合わせ

ていたのである。こうした意味で、河野はやはり民権派ナショナリストであったのである。

こうした一時的な河野の中央政界における輝きは、地元福島県では大いに喜ばれた。

### 3 批判と称賛

さて、自由党脱党後の政治軌跡の中で、前述の事態に並ぶハイライトとして河野の動きが注目を浴び、批判に晒された場面がある。それは、桂太郎首相の新政構想に賛同して、大正二年二月に立憲国民党を脱党し、その後立憲同志会に入党したときである。

長年、桂を藩閥の代表者の一人として批判してきたにもかかわらず、その膝下に走ったと見られたから、河野への批判は当然のことであった。しかし、これまで見てきたように、すでに初期議会において河野は伊藤博文に接近したこともあり、日清戦後には第二次伊藤内閣との提携に奔走したこともあった。立憲政友会の発足の際にも、伊藤から入党の勧誘があったことを『磐州伝』が記している<sup>(122)</sup>。

さらに、日露戦後の明治四一年から四二年にかけて、河野は新党樹立を構想する中で、大石正巳や島田三郎と共に、山県有朋の引き出しを話し合ったことすらあったので

ある。<sup>(124)</sup>

こうしてみると、河野は長州閥に親近感を抱いていたようであり、桂への接近もそうした文脈の中で捉えることが出来るよう。

しかし、自由民権運動以来の河野の名声を汚すものとする批判の声も大きかった。

後年、右翼思想家として紫雲莊の代表となった橋本徹馬は、当時、入営中（香川県善通寺輜重兵第一大隊第二中队輸卒）であったが、「立憲青年党幹事長、世界之日本社長」として、河野に寄せた書翰の中で、次のように河野を批判している。<sup>(125)</sup>

桂内閣起ちてより以来、閥族打破・憲政擁護の声到る処に盛んにして国論の沸騰「中略」誠に愉快禁ぜざる者に御座候。然るに「中略」近頃聞く処によれば「河野」先生には近來官僚派に款を通じ、桂公の政党組織後はその旗下に走せ参ぜんとするの形跡ありと云ふ。

小生等、固より之を信ぜず。苦節三十余年、常に能く国論の先鋒となり、生等をして『誠に帝国の道義の維持者なり』と迄思はしめたる先生が、今に及んで晩節を汚がさる、等の事無きは毫も疑を容れざる処なり「中略」先生が昨今何等国論指導の爲め御尽されざる

河野広中覚書（下）（長井）

処より見る時は「中略」甚だ失礼なる臆測に候へ共、或いは平生奔走の費にも窮せしむるに至りたるに非ざる乎「中略」何卒生等をして失望、落胆せしむるが如き事なからん様「中略」御注意下され度候。「中略」先生の御心の変らせられざる限り、先生は実に帝国の至宝なり。後進の模範なり。生等及ばず乍ら先生御跡をつがんとする者なれば、希くは死を以て先生の爲めに参し、先生のご指導を仰ぎ申すべし。

ここには、青年政治運動家の河野に対する敬慕の念と共に、河野が晩節を汚すことになることへの悔しさが切々と述べられている。

こうした批判に対して河野は、次のような論理で自分の行動を正当化していた。すなわち、立憲政友会を中心とする護憲運動は、桂新党構想によって従前の情意投合路線を断たれてしまった同党が「落胆、失望、驚愕、狼狽」して「人心を誘起」し、「紛擾」を引き起こしたものであるというのである。<sup>(126)</sup> また、桂新党構想については、「桂公の如きは断して妥協政治「情意投合路線」を排斥し、新たに政党界に入りて憲政の運用をなさんと決心せるは、実に時代の一大進歩にして、国家の爲に双手を挙て歓迎すべきもの也。苟も政見合致すれば昨日の敵は今日の同志たり」とし<sup>(126)</sup>

て、桂の政党人化と捉え、これを歓迎すると共に、二大政  
党制への道を切り開くものとの希望を表明したのである。

河野のこうした論理を受け入れる支持者がいたことも確  
かである。そうした支持者は、いわゆる桂園時代における  
立憲政友会の横暴に不満を募らせていた。

例えば、宮城県仙台市から発信された大正二年二月一五  
日付河野宛池田周五郎の書翰<sup>(17)</sup>は、立憲政友会を「政権争奪  
の前に者、国民の辛苦と国家の財政難とて毫も顧慮する処  
にあらざる」ものであり、「憲政擁護・閥族打破は「中略」

政権に恋々たる野心家の策略にて、国民を欺ける飛聞」で  
あると切つて捨てたのである。また、山梨県南巨摩郡から

発信された大正二年二月一五日付河野宛望月遜の書翰<sup>(18)</sup>も、

長年にわたる桂太郎信奉者であるとして、立憲政友会を  
「真に権勢利禄の醜団、一方に在つては友党を偽り、国民  
を欺き、恬として愧つるなく厚顔無恥、其陋劣なる形容に  
窮候。」「中略」彼等が議会に於て叫びし声は国民之声には

無之候。寧ろ純良なる国民は此偽党なる政友会之撲滅を希  
望致居候」と激烈なことで立憲政友会を罵倒していた。

河野に寄せられたこうした数々の声の中に、維新以来の  
河野への信頼感を伝えるものもあった。茨城県水戸市から  
発信された大正二年二月一五日付河野宛関戸寛蔵の書翰<sup>(19)</sup>

は、河野の「維新以来之実績に徴し御行動の端正剛直、艱  
難に屈せず、権勢に阿らず、毅然特行之大丈夫たるを尊  
信」するとして、「新政党之樹立は権勢の一進歩に相違無  
之事」と、河野の行動に対し全面的に理解を示したのであ  
る。そして、さらに「今や一大政党を組織し、一面には立  
憲国の本義に従ひ、一面には他党の専恣を制するは実に当  
世に適したる要務に可有之候」「中略」微力及び不申候へ  
共、当県下だけは可成多数の入党者を得候事に尽力可仕  
候」と激励した。<sup>(19)</sup>

こうして、河野は護憲運動の中での批判を乗り切つて  
いったのである。しかし、同運動の中で尾崎行雄や犬養毅  
の名声がいつそう高まり、後世の評価を高いものにしたの  
に比して、河野の評価は複雑なものとなった。

さて、河野の地元福島県における影響力保持については  
前述した通りであるが、実は、明治四〇年代以降陰りが見  
え始めていた。

立憲政友会が原敬の指導の下で地方利益誘導政策を進め  
る中で、福島県でも平郡鉄道（現在、磐越東線）敷設の要  
望が登場したが、そのとき河野はこれに冷淡な態度を示  
し、支持者を失望させたことがあったのである。

中通り（県北・県中・県南を結ぶ福島県の中央地域）の

中心地である郡山町と浜通り（太平洋岸地域）の中心地である平町を結ぶ鉄道の建設促進運動は、明治四〇年一月、福島町で立憲政友会東北支部総会が開催されたときに決議されてから本格化した。<sup>(13)</sup>すでに明治二九年に上野・青森間（現在、東北本線）が、同三一年には上野・岩沼間（現在、常磐線）がそれぞれ開通していた。そこで、この両線路を県内において東西に結ぶ線路として平郡鉄道が要望されたのである。

立憲政友会所属の福島県選出代議士である佐々木鉄太郎、柏原左源太、佐治幸平らは、第二五、二六議会に連続して平郡鉄道建設に関する建議案提出に尽力し、これを可決させることに成功した。<sup>(12)</sup>そして、第二七議会では平郡鉄道が政府（第二次桂太郎内閣）提出の鉄道敷設法中改正法律案に第一期予定線として盛り込まれ、貴衆両院で可決されるに至った。<sup>(13)</sup>その後、平郡鉄道は、大正三年七月に郡山・三春間が、次いで同四年三月に三春・小野新町間、同七月に平・小川郷間、さらに同六年一〇月に小野新町・小川郷間がそれぞれ開通し、完成した。そして、磐越東線と改称された。大正三年七月二一日、郡山・三春間が開通した際には、三春町において盛大な祝賀会が催された。その祝賀会に河野は欠席している。河野の「日誌」<sup>(14)</sup>大正三年七

月二一日の条には東京から「三春連合祝賀会」宛に祝電を発した旨の記述があるのみである。

その頃、恐らく明治四一年から同四四年頃にかけてのことと思われるが、『立憲政友会福島県史』<sup>(15)</sup>によると、自由民権運動以来の河野の支持者である草野良八（夏井村）という人物が、上京して河野の私邸を訪ね平郡鉄道敷設の要望を訴えたところ、河野は、鉄道の敷設は土地をつぶし地方のためにならない、「地方のさ、たる問題で吾を煩すとは何事である」とけんもほろろに突き放したという。その結果、河野への信頼感を失った草野は立憲政友会の人々に合流することとなった。

この挿話は、立憲政友会に所属したあとの県会議員草野の立場から述べられているので、多少割り引いて受け止める必要がある。しかし、かつて会津三方道路問題をめぐる騒擾を地域的な問題としてこれに興味関心を高めなかったのと同様に、河野が地方利益に熱心でなかったことは指摘できるであろう。そのために、支持者をみすみす対立政党に奪われることもあったのである。もともと、見方を変えれば、河野は常に日本という国家を単位として自らの政治行動を考えていたともいえるのであり、河野を再評価する際に重要な指標となる。



なお、『立憲政友会福島県史』は当時の河野の所属政党を憲政会としているがこれは誤記である。そして憲政会自体が鉄道敷設に反対であったと記述しているが、これも事実に反する。明治四四年二月、第二七議會に河野と同じく立憲国民党に所属する平島松尾や鈴木寅彦らは栃木県今市・福島県会津・山形県米沢を結ぶ鉄道、また福島・相馬間および平・小名浜間を結ぶ鉄道という合計三つの鉄道建設を要望する建議案を提出しており、必ずしも鉄道建設に反対であったとばかりはいえないのである。恐らく、この三つの建議案は立憲政友会の鉄道政策に対抗するものとして提出されたのであろう。

まさしく、栃木県今市・福島県会津・山形県米沢間および福島・相馬間の鉄道建設を求める建議案は立憲政友会からも提出されており、その両案は可決されたものの、平島らの両案は否決された。さらに、平・小名浜間の鉄道建設を求める建議案も、小名浜港整備に関する調査が不十分であるという理由から否決された。いうまでもなく、平島らの三案は立憲政友会の握り潰しにあったのである。同議会では、福島市および信夫・伊達・安達・双葉・相馬の五郡の有志六七九名による福島・相馬間の鉄道建設を求める請願が貴族院に提出され可決されているが、この一市五郡の

人々の輿望を担うのは立憲政友会ということにならざるを得なかった。<sup>136</sup>

鉄道建設要望に対する河野の冷淡な態度はその後も変わらなかったようである。大正八年の河野自筆の書翰草稿に、鉄道建設は「公費を以て支弁する公営事業」であり「一党一派の利害、消長と混淆すべきものにあらす」とし、「政党拡張の具に供する」ことは「社会民衆を侮蔑」することであるという河野の考え方が示されている。しかし、国政を担う代議士こそは、その「公費」の適正な配分を考え議論すべき立場にあり、それこそがまさに政治の筈だが、河野はそうには考えなかったのである。要するに、河野は地方利益誘導を図ることの出来る政治家ではなかった。

そのような晩年における衰勢の中で、河野が、普通選挙の実現に努めたことは、河野の民権派としての評価を最終的に刻印することとなった。なお、『磐州伝』は河野の普通選挙運動に全く言及していない。それは、恐らく、大逆事件で死刑となった幸徳秋水らと一時期運動を共にしていたことによるものであろう。<sup>138</sup>

大正十一年二月二十四日、第四五議會において七三歳の河野が憲政会を代表して普通選挙法案（正式な議案名は、衆

議院議員選挙法中改正法律案」の提出理由説明のために壇上に上がったことは、老年に達した河野へのはなむけであつたろうが、河野はその役目を見事に果たした（ただし、法案は否決された）。

河野は、ロシア革命における君主専制政体の崩壊と共産主義による「暗黒時代」の到来を教訓として引きつつ、「革命の本場」でありながら過激な思想が伝播しないフランスにおける国民の政治参加意識の高さを指摘し、「万機を公議に決する御聖旨」に則つて普通選挙の必要を訴えるという畢生の演説を行つた。<sup>(13)</sup>

ここでも河野は民権派ナショナリストとしての考え方を示している。そして、その知名度をもつて輿として担がれたのである。

河野は、自由党脱党以後、こうして担がれる役回りを演じるにより、一時的とはいふものの、舞台の上に立つて輝きを放つことが出来たのである。

もつとも、このような担がれるタイプの政治家といえども、必要とされる場面で求められる役目を果たす政治資源を有しなければならない。河野における政治資源とは、何よりも地方選挙民における民権派ナショナリストとしてのイメージと知名度の高さであつたろう。

河野広中覚書（下）（長井）

河野は、自由党脱党を画期として、自ら政局を動かそうとする政治運動家、政治家という役回りから、その時代の政治経歴を政治資源として、政局を動かそうとする担い手によって担がれる政治家という役回りに転じた。そして、それによって政治的命脈と価値を保つたのである。

## おわりに

河野は、大正一二年一月二十九日に肝臓癌で亡くなったと公表された。<sup>(14)</sup>

彼の死を悼む新聞記事の中に、「三十余年翁〔河野〕に師事して居るといふ同郷の植田嘉吉」という人物の談話があり、そこには「翁の清廉潔白は今の世間の人々から見れば馬鹿らしいと思はれるほど」であり、「豪家で知られた河野家も今は故郷に家屋敷なく東京大塚仲町の邸も月六十円の借家」「福島」県内にも多大の負債がある模様だが、その殆ど総ては後進の爲め借用証文の保証をした尻拭ひ」「自身は歳費以外の収入なきこととて極度に切りつめた生活をし」「政治が金権、官権と結びつけば国は亡びるといふが翁の信念」であつたと記されている。

こうした清廉潔白なイメージは、確かに民衆に寄り添う政治家として好ましいものかも知れない。しかし、その一

方、自身の政治資金集めの苦労や、利益配分を要望する政治家や有権者への無関心ないし冷淡さに通じるものでもある。まして、他人の借金の尻ぬぐいにまで関わるようでは、政治家としてナイーブであつたと評されても仕方がない。日清戦後の第二次伊藤内閣との提携に関わる金銭的な条件についても、本人はあくまでも真剣であつたのかも知れないが、他者からの批判的な視点に十分な配慮が行き届かなかつた可能性もある。

いずれにせよ、河野の政治運動家、政治家としての一面を物語る挿話である。

振り返って、河野の政治運動家、政治家としての特質を考えてみよう。

河野は、代議政体を構想しつつ政治参加の権利拡大を主張し、その権利を得た人々によって選出される政治エリート（被選出エリート）として国政の場で代議士（職業政治家）となることを望んだ。その意味では、まさしく民権派と呼ぶにふさわしい。そして、その様な立場から政治運動家として藩閥政府（非選出エリート、人々によって選出されたのではない政治エリート）と対立、対決した。しかし、テロのような暴力行使には至らなかつた。そして、憲法制定、帝国議会開設という立憲政治の開始とともに、代

議士となり、主権在君の立憲国家である日本において立憲政治の完美、すなわち政党政治の確立や普通選挙の実現に努めたのである。

一方、自由民権運動期における清国への低い評価、そして日清・日露両戦争への全面協力（時に対外硬としての政府批判）や条約改正促進への積極性に見られるように、欧米先進国に伍して日本の国際社会における国威発揚、地位上昇をも追求した。

このような意味で、河野はまさしくナショナリストなのである。河野の長い政治経歴は、幕末の尊王思想に始まるが、それは歴史思想的な意味での皇国思想として、自由民権運動家としても、職業政治家としても、変わることなく保持されたのである。

その意味で、河野は民権派ナショナリストと呼ぶにふさわしい。

それに関して、河野の甥河野広牀についても触れておこう。彼は、明治一二年、叔父の高知旅行に伴われ、同地の立志学会で学んだのち帰郷して喜多方事件に関わったが、官憲の目を逃れて逃走し、同一七年加波山事件で高官暗殺を企図したテロリストとして逮捕、投獄されるに至った。その広牀が、後年、昭和七年三月一日付で時局に関して認

めた意見書<sup>（註）</sup>がある。その中で、彼は政党を含む政治の現状を憂え、批判したのち、次のようなことを述べている。

政治家も、宗教家も、資本家も、労働者も、理想派、唯物派も、将たマルクスも、フアシヨも、ギルドも、ヒットラーも、尽く来りて集まるべし。聖天下の下、一視同仁均しく是れ陛下の赤子なり。「中略」英米帝國主義の掣に倣ふて領土の拡大を望むにあらず。自由の大道に依りて国際的にも闊歩せん。「中略」憂ふべきは物質にあらずして人心に在り。

ここに示されているのは、皇国中心主義とでもいうべき思想である。自由という概念は広牀にあってこうした帰着点を迎えたのである。しかし、それは帰着点であつただけでなく、実は低い身分階層の人々が幕末の尊王運動において獲得した自由に由来する出発点でもあつたのではないか。そして、それは河野についても適用されるように思われるのである。

次に、彼の政治活動ぶりについて見てみよう。

明治十年代前半の政治運動家の時代、そして出獄後の大同結運動から職業政治家として初期議會を経て日清戦後の自由党脱党までの間、中央政界において河野は輝きを放ち続けた。しかし、自由党脱党以後は勅語奉答文問題、日

露講和反対運動、農商務大臣就任など一時的な輝きを放つものの、全般に不遇をかこつこととなつた。

河野は、板垣退助のように晩年において中央政界における輝きを失つたタイプではなかつたものの、伊藤博文や山県有朋などの有力な藩閥政府指導者のように、あるいは原敬、尾崎行雄、犬養毅など有力な政党政治家のように生涯輝き続けるタイプでもなかつた。

前半期には自ら輝き続け、後半期には他によつて一時的な輝きを取り戻すということになつた。ともかくにも、輝きが失われなかつたのは、自由民権運動以来、河野の民権派ナショナリストとしての輝きを地方の選挙民が支持し続けたからである。

それは、彼が労を惜しまず、度重なる地方遊説に足を運んだ賜物であり、人々のそうした河野イメージは何よりの政治資源となつた。大正一二年九月、河野は八月以来の体調不良にも関わらず、また関東大震災の直後にも関わらず、福島県の県會議員選挙の応援演説の旅を行った。そして、その三ヶ月後に死去したのである。河野には、人々の記憶に残るような議會などでの名演説や、人々に読み継がれるような著作物はない。しかし、聴衆に直接訴えかける会場での演説を全国各地で繰り返しつつ、人々の政治への

不満をすくい上げたり、溜飲を下げたりすることに貢献した。自由民権運動時代に、誰に指導を受けることもなく、自分なりに身につけた演説術（恐らく一生抜けなかった三春アクセントによるもの）は、生涯有効であった。

第三に、河野は、地方利益誘導の不得手な職業政治家であつたことを指摘しなければならない。それは、政治資金不足や家計窮迫に苦しむことと一体のものであつた。福島県会議長として三島県令と対立したといつても、それは河野に福島県振興のための対抗的な政策構想があつてのことではない。あくまでも中央での主に国会開設をめぐる藩閥政府指導者と自由民権運動家との対立を反映したものであつた。また、河野は会津三方道路問題や平郡鉄道敷設問題、水郡鉄道敷設問題に熱意を示すことがなかったが、それも彼が地方利益に鋭敏な政治感覚を有しないことの反映であつた。なお、彼の政治における中央指向性も深く関わっていることはいふまでもない（河野は地方分権を政治課題の一つとしたが、それも中央政界における政治争点として取り上げるものであつた）。

しかし、地方利益誘導が不得手であるにも関わらず、地元福島県では晩年に至るまで支持基盤が揺るがず、生涯、代議士であり続けることが出来た。河野が、福島県を自由

民権運動の発祥の地とした、ひいて日本における立憲政治への源流の一つとしたという地元選挙民の誇り、そして、そのために河野は全国的に知名度が高いという誇りは、河野の欠点を補って余りあるものであつた。河野が中央政界で不遇であればあるほど、地元選挙民の支持意識は高まつたのではなかつたらうか。

自由民権運動家としての経歴を経て、国政の場で代議士となつた者の多くが主権在君の立憲国家である日本の立憲政治の発展（政党政治・普通選挙制度・二大政党制）に貢献したことは間違いない。それは、民権派ナシヨナリストとして彼らが当初からめざしていたことであつた。そして、周知の通り、彼等こそは今日の保守政党における代議士（戦後政治における国会内の多数派）の源流となつたのである。

河野もその一人であり、今日の民主主義への道を考える上で重要な人物であることに疑問の余地はない。

## 註

- (83) 升味準之輔『日本政党史論』第二卷、東京大学出版会、一九六六年。佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』吉川弘文館、一九九二年。伊藤之雄『立憲国家の確立と伊藤博文』

同上、一九九九年、小宮一夫『条約改正と国内政治』同上、二〇〇一年。

(84) 『磐州伝』下巻、一三九―一四三頁。

(85) 徳富蘇峰編・述『公爵山県有朋伝』下巻、原書房、一九六九年、一三一―一四頁。なお、同書には、河野らと会見したとする記述はない。

(86) 『磐州伝』下巻、一八〇頁。

(87) 升味準之輔『日本政党史論』第二巻、東京大学出版会、一九六六年、二一八―二二八頁。

(88) 『磐州伝』下巻、一五〇―一五二頁。

(89) 独立行政法人国立公文書館所蔵「明治二四年公文雑纂巻三三議會第二回」所収「衆議院議員河野広中、外四名ヨリ海軍大臣ノ演説ニ関スル質問ニ対シ答弁ノ件」。

(90) 明治二五年五月二日。『帝国議會衆議院議事速記録』四、東京大学出版会、一九七九年、四六―四七頁。

(91) 同右、四六頁。

(92) 註(83) 前掲佐々木著書、二五〇頁。

(93) 『磐州伝』下巻、二九一頁。

(94) 明治二六年一月一九日付河野宛長野普観書翰、「河野文書」R―94。この書翰は、西白河郡の白陽会という組織の九名の有志が寄せた河野への謝辞である。明治二六年一月一九日付河野広中宛手塚銈藏書翰、同上R―105。この書翰は青森県在住の「平常自由主義を抱懐する」支持者が「国家を思ふ」「河野の」「御誠意」に「感涙」に耐えないと伝える。

ものである。明治二六年三月二一日付河野宛矢吹丈助書翰、同上R―108。この書翰は、第四議会の閉幕を迎えることができたのは、「大多数なる輿論を代表し院内民党惣理」となった「尊台」「河野」の力なり」と河野を称賛している。

(95) 『磐州伝』下巻、一八〇頁。この記述は、同書における最初の星批判である。

(96) 同右、二四〇頁。

(97) 註(83) 前掲小宮著書、二〇七―二〇八頁。

(98) 明治二七年一月二〇日付河野宛原田十衛書翰、「河野文書」R―81。

(99) 明治二七年一月二三日付河野宛藤井貞太郎書翰、同右R―84。

(100) 註(83) 前掲佐々木著書、三六三―三六四頁。

(101) 註(83) 前掲升味著書、二四七―二七五頁。

(102) 明治二九年三月三〇日付伊藤博文宛陸奥宗光書翰、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』七、塙書房、一九七九年、三三二―三三四頁。

(103) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「龍野周一郎関係文書」所収「一八〇旅行日記」。

(104) 「国民の責任を奈何」、「河野文書」R―26。

(105) 「二大政党樹立に関し河野広中意見書」、同右R―48。

(106) 平島松尾『安達憲政史』国書刊行会、一九八五年、復刻版、一八六―一八九頁。

- (107) 『磐州伝』下巻、五〇八頁。
- (108) 同右、五一三—五一四頁。
- (109) 明治三二年三月二日付河野宛期宿仲衛書翰、「河野広中文書」R—77。註(2) 前掲高橋哲夫『福島人物の歴史 第一二巻河野広中』下巻、一四四頁も、この書翰に言及している。
- (110) 『福島県史』第一六巻・政治二・各論編二、福島県、一九六九年、六四頁。
- (111) 明治三五年四月三〇日付河野宛猪狩真琴書翰、「河野文書」R—85。発信者の猪狩は、福島県標葉郡北上迫村(現在、双葉郡広野町)の神官で石陽社以来の河野の知己である。猪狩の経歴については、以下を参照。註(2) 前掲高橋哲夫『福島人物の歴史第一二巻河野広中』下巻、六六—六七頁。同『福島民権家列伝』福島民報社、一九六七年、三四五—三四六頁。広野町史編さん委員会編『広野町史資料編』第二集、広野町、二〇〇五年、七九頁、一七七—一八二頁、一九三—一九五頁、二二一頁、二九三—二九六頁、三〇二—三〇三頁。同『広野町史通史編』二〇〇六年、四六四—四九〇頁。栖葉町史編纂委員会編・庄司吉之助監修『栖葉町史』第三巻・近代現代資料、栖葉町、一九八五年、三四頁。
- (112) 註(106) 前掲『安達憲政史』、四六六—四六七頁。
- (113) 明治三四年六月二五日付河野宛平島松尾書翰、「河野文書」R—71。
- (114) 註(111) に同じ。
- (115) 『河野文書』R—78。
- (116) 同右R—79。
- (117) 以上、永井和「日比谷焼打事件と倉富勇三郎」、立命館大学人文学会『立命館文学日本史特集』第六〇五号、二〇〇八年三月、一六一—一六三頁。
- (118) 原奎一郎編『原敬日記』第二巻、福村出版、一九八一年、八三頁、明治三六年一二月二日の条に河野の「運動甚だしく」とある。
- (119) 勅語奉答文問題に関しては、秋山定輔や尾崎行雄らの帝國ホテルでの策動があった。これについては、註(19) 前掲『河野広麻氏談話速記』においても言及されている。また、伊藤隆「小川平吉小伝並に主要文書解題」三三—三四頁、小川平吉文書研究会編『小川平吉関係文書』一、みすず書房、一九七三年。前掲『原敬日記』第二巻、八五—八六頁、明治三六年一二月一〇日、同一日の各条を参照。日比谷焼き打ち事件における河野「シャッポ」論に関しては、酒田正敏「近代日本における対外硬運動の研究」東京大学出版会、一九七八年、二八四—二八五頁を参照。
- (120) 北岡伸一「政党政治確立過程における立憲同志会・憲政会(下)」二四七頁、立憲法学会『立憲法学』第二五号、一九八五年九月。
- (121) 「明治四〇年七月日韓併合建議」、小川平吉関係文書研究会編『小川平吉関係文書2』みすず書房、一九九七年、二

八頁。

(122) 【磐州伝】下巻、五七三頁。

(123) 同右、七三四—七四〇頁。

(124) 大正二年一月二日付河野宛橋本徹馬書翰、「河野文書」R—82。

(125) 「河野広中演說草稿」、同右R—27。

(126) 「二天政党樹立に關し河野広中意見書」、同右R—48。

(127) 「河野文書」R—85。

(128) 同右、R—94。

(129) 同右、R—100。

(130) 大正二年二月六日付河野宛関戸覺藏書翰、同右。

(131) 以下の記述は、特に断らない限り、三春町編刊『三春町史』第四卷・近代二・通史編四、一九七六年、六一九—六四九頁による。

(132) 註(29)前掲書、二六四—二六五頁、三三二頁。註

(68)前掲書、二二五頁。註(72)前掲書、四三七頁、四九九—五〇二頁。『帝國議會衆議院委員會議録』五八、東京大学出版会、一九八九年、三八六頁。

(133) 【帝國議會衆議院議事速記録】二五、東京大学出版会、一九八一年、三五頁、二七八—二七九頁。『帝國議會衆議院委員會議録』六四、同右、一九八九年、三五九、三六三、三九八の各頁。『帝國議會貴族院議事速記録』二七、同右、一九八一年、一三五頁、一五五—一五六頁。『帝國議會貴族院委員會速記録』二七、同右、一九八七年、九七

河野広中覚書(下)(長井)

—一〇二頁。

(134) 【河野文書】R—3。

(135) 半谷真雄編・佐藤庄太郎監修『立憲政友会福島県史』立憲政友会福島県史編纂会、一九二九年、八五四—八五五頁。

(136) 註(133)前掲『帝國議會衆議院議事速記録』二五、八五—八七頁、一一〇—一一三頁、一二四—一二六頁、二八五、五五八の各頁、『帝國議會衆議院委員會議録』六七、東京大学出版会、一九八九年、七七—七九頁、八一—八五頁、二七五—二八一頁。同『帝國議會貴族院議事速記録』二七、一九七頁。

(137) 大正八年月日不明河野広中書翰草稿、「河野文書」R—78。

(138) 河野の普通選挙運動における動きについては、松尾尊允

『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店、一九八九年参照。

(139) 【帝國議會衆議院議事速記録】四〇、東京大学出版会、一九八二年、三三二—三三四頁。

(140) 「埋葬許可証」に肝臓癌と記述されている。「河野文書」R—64。

(141) 大正二二年二月三一日付東京朝日新聞。

(142) 「所感ヲ記シテ高覽ニ供ス」、「河野文書」R—35。